

二条裸麦「キラリモチ」の遅れ穂抑制と多収を両立する栽培法

[要約]

二条裸麦「キラリモチ」において遅れ穂の発生を抑え、目標収量360kg/10aを達成するには、播種期は11月中、播種量は8～10kg/10a、基肥窒素量は標準～標準+2kg/10aで、基肥に重点をおいた施肥法が適する。

農業総合センター農業研究所

平成30年度

成果
区分

技術情報

1. 背景・ねらい

精麦用大麦品種の二条裸麦「キラリモチ」は、①食物繊維に富む（高β-グルカン）、②炊飯後に褐変しにくい（プロアントシアニジンフリー）、③良食感（糯性）の特性を有するため、実需者からの増産の要望が強い。また、本県の二条大麦の主要品種である「ミカモゴールドン」より耐病性が優れるため、平成29年に本県の認定品種に採用し、平成32年産は、およそ300ha作付される見込みである。しかし、「キラリモチ」は低収であり、また、遅れ穂が発生しやすい特性から収穫時期の遅れによる品質低下が生じる懸念がある。そこで、遅れ穂の発生を抑えつつ、目標収量360kg/10aを達成できる高品質安定栽培法の開発が必要である。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 11月中に播種することで目標収量360kg/10aを達成できる。一方、12月の晩播では目標収量を達成できず、遅れ穂が多く発生する（図1）。
- 2) 播種量は8～10kg/10a、基肥窒素量は標準～標準+2kg/10aで多収が得られる。一方、播種量を少なくすると遅れ穂が多発する（図2）。
- 3) 総窒素量が同じ場合、基肥に重点をおいた施肥法の方が遅れ穂は少なくなる（図3）。
- 4) 1)～3)の内容と、「キラリモチ」の生育特性を併せたマニュアルを作成した。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、農業研究所水田利用研究室（中粗粒灰色低地土）における、平成26年産～平成30年産の結果である。
- 2) 農業研究所水田利用研究室における「キラリモチ」の標準栽培は、条間30cm、播種量10kg/10a、基肥窒素量8kg/10a、茎立期の追肥窒素量2kg/10aである。
- 3) 遅れ穂の登熟に合わせて収穫を遅らせると、「やけ粒」（表面が茶褐色を帯びた粒）が多くなる傾向があり品質の低下につながるため、適期に収穫する。

4. 具体的データ

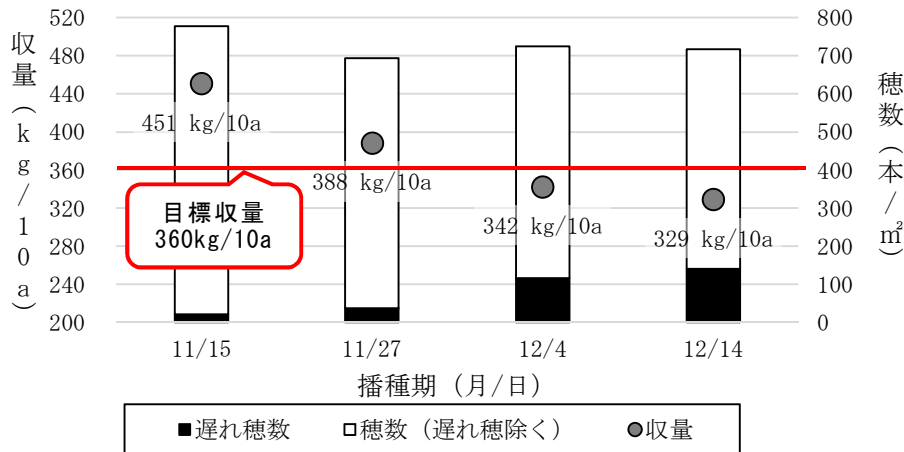


図1 「キラリモチ」の播種期別の収量と遅れ穂数 (H30 産)

注1) 播種量は 8 kg/10a~10kg/10a

注2) 基肥窒素量は 8 kg/10a~10kg/10a、茎立期の追肥窒素量は 2 kg/10a

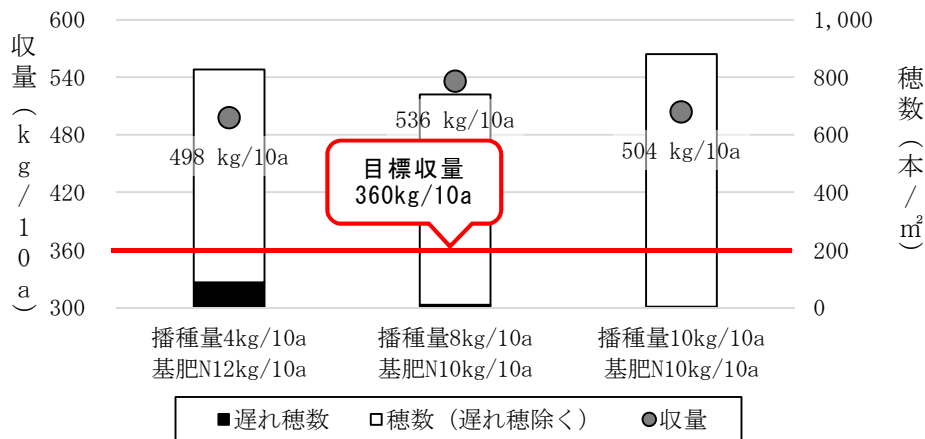


図2 「キラリモチ」の播種量と基肥窒素量別の収量と遅れ穂数 (H30 産)

注1) 平成29年11月15日播種、茎立期の追肥窒素量は 2 kg/10a

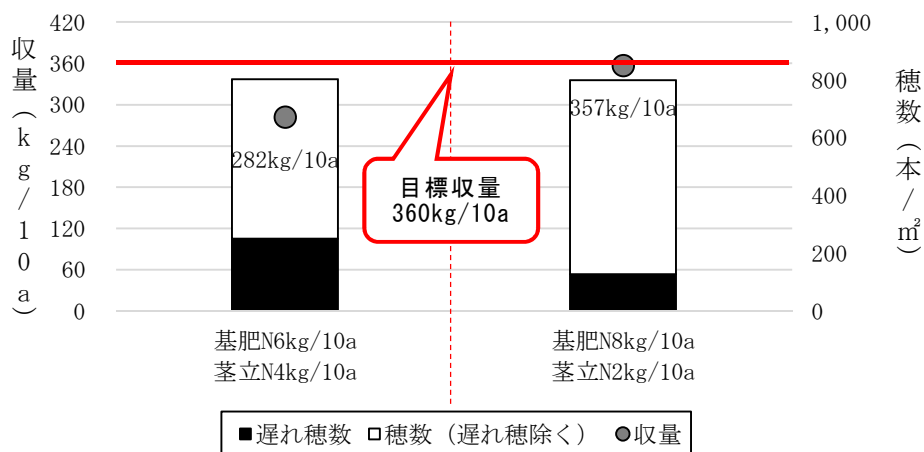


図3 「キラリモチ」の基肥窒素量と追肥窒素量別の収量と遅れ穂数 (H26、H27 産平均)

注1) 播種期は平成25年11月9日、平成26年11月11日、播種量は 10kg/10a

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

二条裸麦「キラリモチ」の高品質安定生産技術の開発・平成29年度～平成31年度・水田利用研究室